

「伝える」を「伝える」に

—全国高校ビブリオバトル二〇一四

澤口哲弥

1 初の高校生全国大会

ビブリオバトルがにわかには活気づいている。読んで面白かった本を五分間で紹介し、聴衆に最も「読みたい」と思わせた本が、「チャンプ本」として選ばれるゲームである。

その全国大会（活字文化推進会議主催）に今回参戦した。大学生の大会はこれまでにあったが、高校生の全国大会は初めてである。二〇一五年一月十一日、よみうり大手町ホールに全国八ブロックの予選を通過した十六名の「バトラー」が集った。

津西高校からの参戦者は二年生のS。『絶叫仮面』（作：吉見知子 絵：平山けいこ）を携えて参戦である。二〇一三年度からビブリオバトルの校内大会を開催している本校では、すでにコアな愛好者が育っているが、彼はその中心人物の一人である。予選は四つのブロックに分けられ、プレゼン5分＋質疑応答2分の計7分〔決勝は質疑応答が3分で計8分〕。ジャッジをするのは団扇を挙げて意思表示〔決勝は投票〕をするすべての聴衆である。さすがに百戦錬磨のバトラーたち、堂々とした戦いぶりであった。「会場の年齢層が高かったですね」とのSのことば通り、出版業界や教育産業関係の方々なども聴衆として紛れ込んでいる気配であった。その中で高校生が笑いも取るわけだから、やはりツワモノの集まりである。

予選を勝ち抜いた本は、『わたしが正義について語るなら』（やなせたかし）、『恋文の技術』（森見登美彦）、『結構相手は抽選で』（垣谷美雨）、『冷たい校舎の時は止まる』（辻村深月）。学校の先生が選書したらこうはなるまいという、「生徒の生徒による生徒のための」選書の妙。これがまたビブリオバトルの愉しみでもある。

2 ビブリオバトルの指導

自分の好きな本を紹介するから簡単と思いきや、やってみると結構これが難しい。

生徒は、往々にして五分間の構成ができず、時間を余らせたり、不足させたり、話をねじらせたりを繰り返す。時系列で話すのが原因だが、この場合は、なるべく構造化して話すように、図化等を取り入れ指導をする。また、「面白い」などの安易なことばを

使わず、面白いと聴衆に思わせる、表現を編み出させる指導をする。選書に関しては、これはもうビジネス講座である。どこに商機があるかを対話しながら決定していく。

Sは終了後「先生、やはり選書で半分は決まりますね」と総括した。なるほど、結果的には「話しぶり」よりは本の中身で勝負が決まったように思う。聴衆をあらかじめ予測した効果的な選書が、こと大会においては重要なようだ。あとは、聴衆の「既知の中にある未知の扉」をうまく開けば、たいいていはあたりがつく。

3 ビブリオバトルと国語科

ビブリオバトルは本を通して人がつながることに意義を置くゲームである。その趣旨やルールの詳細については「ビブリオバトル普及委員会」のホームページで確認できるので、ここでは国語科における学びとの絡みでその意義に触れてみたい。

説得コミュニケーション論の観点から見て、ビブリオバトルには、①選書、②情報の統合と解釈、③聴衆の想定、④言語表現の四つのストラテジー（戦略）があると考えている。聴き手を「読み」ながら説得を目指す、総合的戦略である。同じ本を紹介するのでもブックトークとの違いはここにある。一方的に「伝える」ことから効果的に「伝える」ことを目指すという、かなり明確な目的性があるのだ。

例えば、「泣けて仕方がない本」と強調するより、「泣くのが見られなくなればひとりで読め」と紹介したほうが効果はあるだろう。また、作品のどこを切り取って紹介するかで聴衆の興味関心にも差が出るだろう。予選ブロックを通過した『わたしは正義について語るなら』のプレゼンでは「正義」の意味を話題の中心としたこともあって、「年齢層が高かった」方々の琴線にうまく触れている様子であった。

私たち教師は、ともすると国語の授業で、「読むこと」と「書くこと・話すこと」とを分けて考えがちである。しかし、ビブリオバトルの指導では、それらの連関を強く意識させられる。なぜなら、論理的な文章にせよ文学的な文章や韻文にせよ、そこにある「伝える」ためのレトリカルな戦略を「読む」ことは、巡り巡って、ビブリオバトルなどの表現活動で活かされ、逆にまたその表現活動は「読む」場面において、書き手の戦

略を意識化し分析できるという形でつながり、フィードバックされるからである。

ビブリオバトルに親しむメンバーたちの多くは、現代文の授業でこういった読解や表現に精通し、より深く読み、表現する学習者へと成長してきた。

従来の枠組みにない、領域を横断した新たな可能性をビブリオバトルは秘めている。

4 図書館主催ビブリオバトル

最後に、身近な実践例として本校図書館でのとりくみについて紹介する。

津西高校では、図書館行事としてのビブリオバトルをこの二年間、十二月の考査明けの放課後に図書館を会場に実施してきた。集うバトラーは約九名。聴衆は毎年七十名ほど訪れる。バトラーにエントリーするのは、授業においてひたすら考え、話し合うことを好む面々である。所属の部活は、演劇部、文芸部、邦楽部から剣道部などの運動部と幅が広い。彼、彼女らをあえてカテゴリー化すれば、既存の学校教育に飽き足らない人びと、ということになるのか。聴衆はみんな、寄席やライブハウスに来る感覚でやってくる。質疑応答の二分間は質問が絶えず、会場のマイク係は大忙しである。

ビブリオバトルはもともと大学のゼミで始まったという。ゼミ生が本（文献）を紹介するときに時間制限を設けたら楽しくなった、というのがことのきっかけらしい。したがって、本来、ビブリオバトルは大人数での開催よりは少人数が適している。筆者は国語表現の授業で実践してみたが、十一名しかない講座ゆえに、それはそれで和気あいあいとしたビブリオバトルができた。しかし、公共性や社会性の観点からすると、ある程度の人数、しかもハイコンテクストな（共通の文脈をもつ）関係にない他者に対してプレゼンをするほうが教育的効果は高いと考える。放課後の図書館行事はその点でバランスが取れているのだろう。

ちなみに、ビブリオバトルには原稿棒読みはできないというルールがある。「伝わる」（相手の心に響く）ことを目的としている証ともいえる、ツボを押さえたさりげなくも重要なルールである。

（さわぐちてつや・三重県立津西高等学校）